

「母音が多い言語は美しい」か

—金田一春彦著『日本語』（上）岩波新書の記述に関して—

仙 波 光 明

Are Languages Rich in Vowel Sounds Beautiful?:
On an Account of the Beauty of Japanese Language in Kindaichi's "Nihongo"
(Iwanami-shinsho). And Also, What is Japanese Guttural?

Mitsuaki SENBA

0 はじめに

金田一春彦著『日本語』（上・下）岩波新書(*)は、日本語全般を見渡す水先案内として絶好の啓蒙書であろう。筆者はここ数年来、「日本の言語」と題する授業のテキストとして利用してきたが、その間に、同書の記述にいくつかの疑問点や初学者の誤解を招きそうな部分を見いだした。これらのいくつかは文脈軽視の引用に原因すると思われ、経験の浅い読者にとっては注意が必要な部分である。本稿では、「日本語の美しさ」の項の検討を通して、言葉の美しさを論じる際にマリオ・ペイがとった慎重さが金田一では生かされていないことに注意すべきことと、日本語のガタラルな音はガ行子音 g ではなくガ行鼻濁音に限定されるべきであることを示す。

(*)以下、原則として、金田一と表す。

1

まず、マリオ・ペイが「言葉の美しさ」を論じるにあたって、どのような立場をとっているかを確認しておこう。なお、本稿で使用するペイのテキストは“The Story of Language Revised Edition”であるが、この項では原文の引用はひかえる。ペイは第2部「言語の構成要素」第11章「言語の審美学」を次のように始める。

この章では書かれた言語の文学的あるいは文体的な美、つまり文学史や

批評に属するのが適切な話題を扱うのではなく、おもに科学的な探求にはあまりに主観的すぎるという理由で言語に関する本では通常避けられてきた主題を扱う。

とは言うものの、これが一般の人の興味を引く主題であることは、「言語は(一般的に)美しいか汚いか?」「どれが世界で一番美しい言語か?」「英語で一番美しい(あるいは汚い)言葉は何か?」といった質問が繰り返されることで証明されている。

このような質問をする人たちはその含むところにほとんど気づいていない。彼らが求めているのは、**文芸的表現から切り離された言語の、そして意味の連想から分離された言葉の美しさに関する論文である。**

ついで、ペイは、歴史時代において「言葉の美しさ」がどのように扱われ、議論されてきたかを簡単に述べた後に、次のように言う。

純粹の言語学者は普通、そのような論争にかかわることを拒む。その理由の一つは何も成果がない、(つまり)論争者によってなされた非常に多くの主張が、まさにその本質から、証明できないということ。また一部の理由は彼(言語学者)の仕事は言語についての科学的な事実を確立することであり、美学理論を確立することではないと考えていること。さらに、理由の一部はそのような議論に含まれる問題には、国粹主義的な自尊心の寄せ集めとか、文芸的評価とか、主観的な評価、感情的な態度が絶望的なくらい混じり合っていて、これらの全ては科学の領域の、まさに外にあるからである。

ペイは、このように述べた後、音声の側面からなら「言語の美しさ」を客観的に論じられるかもしれないとして、論を進めているのである。「言語の美しさ」を論じることは非常に困難だが、多くの一般読者の要望に応じて、この問題を考えようとしているかのようである。

2

以下、金田一「2 日本語の美しさ」(p.100~101)に見られる記述を、6項目に分けて、マリオ・ペイの『言語の話』(“The Story of Language”)の該当箇所と比較しながら検討しよう。ペイの引用に示したページは、1965年の Mentor 版のそれである。

①M・ペイは……耳に聞いて美しい言語とそうでない言語がある，ということを行っている。(100ページ，11～12行目)

ペイの記述からは，上記の内容と完全に合致する部分を見いだすことはできない。やや関係があるのは次に引用する部分であろうが，ここから分かるのは，ペイは「耳に聞いて美しい言語とそうでない言語がある」と，簡単には断定しないだろうということであろう。

There is only one compartment of language concerning which it may be said that there is some justification for an objective esthetic discussion (provided it is granted that there is no inherent antithesis between the two terms “objective” and “esthetic”). This is the field of sounds. Even here, however, we have the injection of factors that are both extraneous and subjective. (202ページ)

〔客観的〕と〔審美〕という二つの術語の間に本質的な対立がないと容認されると仮定してのことだが) 客観的・審美的議論に多少の正当性があるとされるかもしれないことに係わる言語の区画が，一つだけある。これは音声の領域である。しかしながら，ここでさえも，我々は(本来は)無関係であり主観的でもある要因の注入を受ける。

②美しい言語というのは，母音の多い言語だという。(100ページ，13行目)

③どうしてかと言うと，歌を歌おうとする場合，sのような子音にはフシがつけられないという。(100ページ，13～14行目)

④またsの発音では，声のいい人も悪い人も区別されないと言う。(100ページ，14行目～101ページ，1行目)

⑤美しい声は母音のところで聞かれる。(101ページ，1行目)

金田一の②～⑤の記述に関しては，ペイの204ページに記された内容が相当する。以下の叙述に際しては，引用した原文および訳文の関係する所に，それぞれの数字を挿入し，下線を付して示すこととする。

②に関して，ペイは，「音声器官で作りやすい音は，私達の話す言語の音素として現れようと現れまいと，美しさの印象を運ぶ。母音は通常子音ほどには調音器官の曲芸を必要としない。というわけで，母音の音が豊かな言語は美しさの印象を運びそうである。」と言い，「母音の純粹さはもう一つの美的要素であ

る。」と言っているが、「美しい言語というのは、母音の多い言語だ」とまでは言っていないのではないだろうか。(この点に関しては、⑥の項でもう一度取り上げる。)

③の「sのような子音にはフシがつけられない」というのも、ペイに照らしてみると、不正確と言わざるを得ないであろう。ペイは、「kissのような語を高いFの音で5秒以上持続したり、stopのような語を非常にゆっくりした3拍子で歌うのは不可能だ」と述べているのであって、「sにフシが付けられない」とは言っていないのではないか。もっとも、「stop」以下の記述は、そのような解釈も可能であろう。

④の記述に相当する部分は、ペイの「言語の審美学」の項には見つからなかった。

⑤に関しても、この通りの表現は見られないように思われる。「子音のかたまりや母音を損なうような子音の音があまりに多すぎるような言語は、ほとんど美しくは発音されない。これは母音の子音より遙かによく音楽的な調子を伝えるからである。」と述べているところから推定できるだけである。

On the purely objective side, there are a few factors that may be said to contribute to a language's acoustic beauty, and these are for the most part identical with those elements that make for musicality. ⑤ Languages in which there is an overabundance of involved consonant clusters, or of consonant sounds to the detriment of vowel sounds, are seldom pronounced beautiful. This is because vowels carry musical pitch far better than consonants. Our ear normally recoils from extreme sounds, whether these be of the guttural, palatal, sibilant, or nasal variety. ② Sounds which are easy for the vocal apparatus to produce, whether or not they appear as phonemes in the language we speak, convey an impression of beauty, though this is to some degree a matter of familiarity. ② Vowels normally require less juggling with the speech organs than consonants; hence languages rich in vowel sounds are more likely to convey an impression of beauty. There is little to recommend to the esthete in combinations like *sk*s in English "asks" or *chtsch* in German Knechtschaft. (204ページ)

純粹に客観的な側面から、言語の音響的な美しさに貢献すると言えるかもしれない、二三の要素があるが、これらはほとんど音楽性に寄与する要

素と等しいものである。⑤子音のかたまりや母音を損なうような子音の音があまりに多すぎるような言語は、ほとんど美しくは発音されない。これは母音が子音より遙かによく音楽的な調子を伝えるからである。私達の耳は、普通それが喉音であれ、口蓋音であれ、摩擦音であれ、鼻音であれ、極端な音には怯んでしまう。これはある程度まで身近さの問題であるが、②音声器官で作りやすい音は、私達の話す言語の音素として現れようと現れまいと、美しさの印象を運ぶ。母音は通常子音ほどには調音器官の曲芸を必要としない。というわけで、母音の音が豊かな言語は美しさの印象を運びそうである。英語の“asks”のsksや、ドイツ語の“Knechtschaft”の中のchtschのような組み合わせには唯美主義者にお薦めできるものは無い。

② Purity of vowel sounds constitutes another esthetic factor. The “cardinal” vowel sounds of *a* in “father,” *e* in “met,” *i* in “machine,” *o* in “or,” *u* in “rude” may be esthetically more attractive than the *a* of “ame,” the *o* of “home,” the *u* of “pure,” which are diphthongs, or the *u* of “cut,” the *i* of “pin,” the *a* of “at,” the *o* of “not,” which are close-clipped and cannot normally be sustained, or such rounded middle-vowel sounds as French *u* and *eu*. Here we tread on dangerous ground, since it may be argued that preferences among vowel sounds are based largely on the factor of familiarity. At the same time, it is a scientifically established fact that ③ it is impossible to sustain a word like “kiss” on high F for more than five seconds, or to sing a word like “stop” on three beats of slow time plus a retard. (204ページ)

②母音の純粋さはもう一つの美的要素である。lameの*a*, homeの*o*, pureの*u*, といった二重母音や, cutの*u*, pinの*i*, hatの*a*, notの*o*, といった狭く、早く発音され、通常持続され得ない母音や、フランス語の*u*や*eu*のように丸口の中舌母音よりも、fatherの*a*, metの*e*, machineの*i*, orの*o*, rudeの*u*のような「基本」母音の音は、美的にはもっと魅力的かもしれない。ここで、我々は危険な場所を歩くことになる（自信をもって話すことができない—仙波注）。というのは母音の優位は身近さという要因に大きく基づくのではないかと主張されるかもしれないからである。と同時に、③kissのような語を高いFの音で5秒以上持続したり、stopのような語を非常にゆっくりした3拍子で歌うのは不可能だということも科学的

に確立された事実である。

⑥イタリア語・スペイン語・日本語のように母音が多い言語は美しい言語だと言うことになるのだそうだ。(101ページ, 1~3行目)

ペイは、三つの言語について、「母音が多いから美しい」とは述べていない。「子音と母音の規則的な交代」が美的な印象と関係があり、「イタリア語やスペイン語、日本語のような音節の大半が母音で終わるような言語」は「普通、音節がたいてい子音や子音の塊で終わる言語よりも、耳に快い印象を作り出す。」と言っているのである。ペイの論旨に沿って考えると、日本語が美しいと感じられるのは、日本語の音節が基本的に CV 構造であるからだということになるのではないだろうか。

⑥ The regular alternation of consonants and vowels has something to do with the esthetic impression. Languages in which a majority of the syllables end in vowels, like Italian, Spanish, or Japanese, normally produce a more pleasing impression on the ear than do those where syllables end for the most part in consonants or consonant clusters. (204 ページ)

以上、金田一の記述に関わる部分について、マリオ・ペイの記述と比較検討してきたわけだが、果たして、「母音の多い言語は美しい」(**)となるのだろうか。言葉の美しさを論じるにあたって、マリオ・ペイは慎重な態度を崩していない。ペイは、①に関して引用した部分に続いて、美しい言葉や汚い言葉の選定が、多くは意味の連想によってなされていることを示し、意味から離れて汚い言葉が選ばれたのは、J・ドナルド・アダムスによって一度試みられたただけだと述べている。そして、母音が美しいとすれば、母音の子音に比べて音楽的要素を多く伝えるからであると言うのである。ペイは、母音が言語の美しさに大きく貢献することを述べながらも、同時に、それが身近さや慣れによって影響されうることにしばしば注意をうながしている。わずか4ページの間、familiarity という語が4回、familiar が2回使われている。

母音以外の要素について、ペイがどのように考えているかも見ておこう。ペイは母音についての記述の後で、「イントネーション、ピッチ、発話の相対的速度は全て美的な現れに関係するが、この点はほとんど個々の話し手次第であ

る。」と言い、イタリア語やドイツ語について、その例を挙げている。そして、続く項では、「美の感覚は、習慣、教育、心理的連想といったあまりにも多くの要因と、結局のところは、個人の選択に支配されている。」「言語という、客観的な実在と実際的な機能を持つものに対して審美的な基準を適用することは、非科学的であるばかりでなく不満足なものになるに違いない。」と述べるのである。

ペイは、「言語の審美学」の章を閉じるにあたって、「どんな鳥でも自分の巣が美しい」というイタリアの諺と、イギリスの諺「埴生の宿も、我が宿にまざるものなし」を引き、チェコ人はrの音を、ウェールズの人にはllを、ホッテントットはクリックや grunts といった、他の言語で育った者には真似られないような音をそれぞれ愛していることに触れ、「ある言語を、本来的に美しいと絶賛することや、別の言語を本来汚いと非難すること」は、文明人には無価値なことだと述べている。

このように、ペイの言うところを見てくると、ペイは「耳に聞いて美しい言語とそうでない言語がある」と結論付けようとしているとは考えないほうがよさそうであるし、「母音が多い言語は美しい」という見方についても、いくつかの条件を考慮した上で、控えめに言えることだということになるのではないだろうか。

金田一は、一般向けの書物でもあり紙数も十分ではないために、ペイが用意した多くの条件を省略したのもあろうか。あるいは、「イタリア語・スペイン語……美しい言語だと言うことになるのだそうだ」というあたりに、そのニュアンスを読みとるべきなのかも知れない。しかし、経験の浅い読者であれば、「美しい言語というのは、母音の多い言語だ」という部分をそのままに受け入れてしまうであろう。初学者の手助けをする際には、以上の諸点に注意を払わなければならないであろう。

(**) ここで「母音が多い」という表現には、「母音音素の数が多い」という意味である可能性もあるが、金田一もペイも、そのような線では論を進めていないので考察の対象から外すことができる。

3 日本語のガタラルはガ行子音か。

⑦「ひびきはイタリア語に似ているが、惜しいことに他の極東語なみにガタラルな音が多い」と言っている。(101ページ, 8~9行目)

金田一は、このことを「日本語の美しさ」の項に引いているが、ペイでは、第4部「現代の言語“THE MODERN SPOKEN TONGUES”」第8章「極東諸語“The Far Eastern Tongues”」の項で扱われていることがらである。ペイは、ここで日本語を中国語と比較して、「日本語の一般的な音響効果は、ほとんどの極東の言語の音調を際立たせているある種の guttural な特性がなければ、中国語よりもイタリア語に近い」と述べているのであって、日本語の美しさとガタラルな音とを結びつけてはいない。

Spoken Japanese, in contrast to Chinese, is decidedly a polysyllabic language. In fact, some of its verb forms run to unconscionable lengths, although the majority of the roots consist of two syllables. A few Japanese words are distinguished by tones, but for the most part tone plays no semantic role in the language.

The syllabic structure is simple, being of the consonant-plus-vowel type, and the general acoustic effect of Japanese would be closer to that of Italian than to that of Chinese were it not for a certain guttural quality that distinguishes the tonality of most Far Eastern languages. (400ページ)

日本口語は、中国語に対比して、明らかに多音節言語である。実際、大多数の語根は2音節からなるにもかかわらず、いくつかの動詞の形態はとてつもない長さになる（注：助動詞などが後接した場合の形態を指すと思われる。）。二、三の日本語の単語は音調によって区別されるが、ほとんどの場合音調は、この言語において意味上の役割をはたしていない。音節構造は単純で、子音プラス母音タイプであり、日本語の一般的な音響効果は、ほとんどの極東の言語の音調を際立たせているある種の guttural な特性がなければ、中国語よりもイタリア語に近いであろう。

ところで、ここで日本語が「ある種の guttural な特性」が無ければ、イタリア語に似ているとされている点に注目すべきだろう。金田一は、この「guttural」をガ行子音 g と解釈しているが、g はイタリア語の音素のリストにもあるのである。「guttural な特性が無ければ、イタリア語に似ている」と言うからには、この guttural の候補はイタリア語には無い音素を想定すべきではないだろうか。そこで、マリオ・ペイが編んだ“Glossary of Linguistic Terminology”

を参照してみると、guttural の項には、「See VELAR.」とあり、Velar の項には、「A consonant formed by the back of the dorsum of the tongue against the soft palate or velum (*cool, go, song, Nacht*). Synonyms: DORSAL, GUTTURAL」と記されている。これを、日本語の音素に当てはめてみると、カ行子音、ガ行子音、ガ行鼻濁音となるであろう。日本語と中国語にあってイタリア語に無い音素を、これらの中から探すとすれば、候補として残るのは、ガ行鼻濁音ということになる。

なお、金田一では「ペイが同じくガタラルな音が多い（注：“replete with guttural sounds” PEI p.337~8）といている」とオランダ語についても言及されているが、ペイはオランダ語の発音と綴りの対応が紛らわしいことをも指摘し、「g は通常、きしむようなガタラル (rasping guttural) を指し、goed は khooD と発音される」ことを述べている (PEI p.337~8)。この音は日本語にはない。また、オランダ語には音素として g はないのである。 (**)

ガ行鼻濁音を正確に発音する方が、日本語の響きとしては美しいと言われてきた事実とは逆のことを、ペイは指摘していることになるのだろうか。ここで、我々はペイが指摘する familiarity と美しさの関係に気づかされる。なお、ペイは日本語のガタラルの美醜を論じてはいない。「言語学概論」を汚い言葉と考える必要はないのである。

(**) 言語学大辞典

【参考文献】

- Pei, Mario. 1957. *The Story of Language*. London: G. Allen & Unwin Ltd. (second impression)
- Pei, Mario. 1965. *The Story of Language*. New York: Mentor. (revised edition)
- Pei, Mario. 1966. *Glossary of Linguistic Terminology*. New York: Doubleday & Company, Inc.
- 亀井孝他編 1988. 言語学大辞典 第1巻 世界言語編 上